

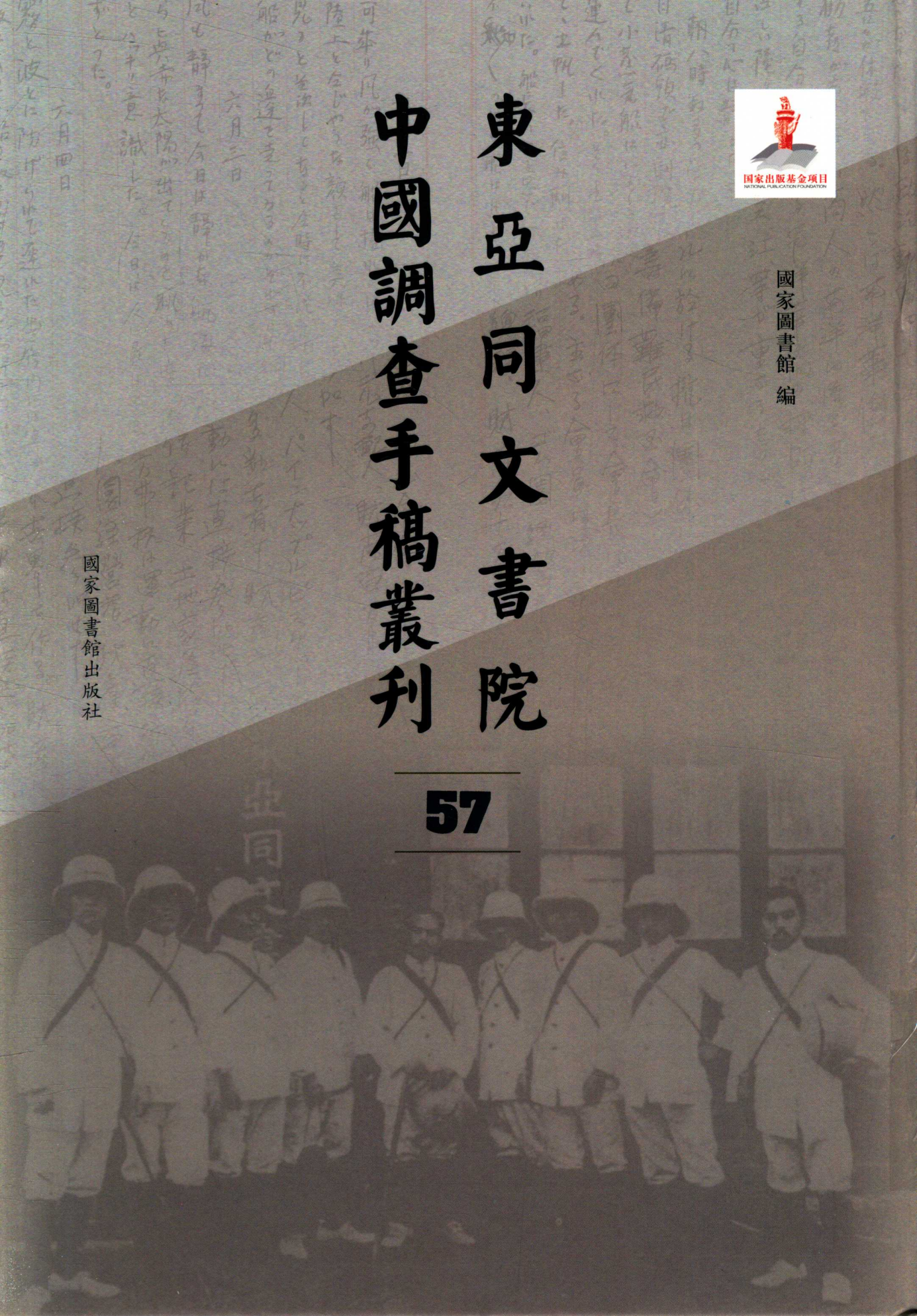


國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

57

國家圖書館出版社





國家出版基金項目
NATIONAL PUBLICATION FOUNDATION

國家圖書館編

東亞同文書院 中國調查手稿叢刊

57

國家圖書館出版社

第五七冊目錄

昭和十四年（一九三九）旅行日誌（第三十六期生）

江淵薰	湖北班		一
松尾勇夫	岳陽班		二九
水野安一	岳陽班		五七
山本尚長	岳陽班		八一
佐藤熙喜	岳陽班		一五五
吉田忠	岳陽班		一九三
西村昇	廈門班		二一七
今西照男	廣東班		二三九
川口守親	廣東班		二七一
鹿毛政人	廣東班		三〇九
岡正住	廣東班		三七三

西村敏雄	廣東班		三九五
土本邦雄	廣東班		四二一
高相武彦	廣東班		四四九
古市清	廣東班		四九七
田尻親種	廣東班		五二七
後藤勝一	海南島班		五五一

和十四年度

大旅行日誌

江淵薰



年一度

大旅行日記

湖北省三八班

江淵董

六月一日 晴 蘇州

シテ年思ひの馳と夢に見るの如く此の江余の旅の六一日未だ
諸先生及在學生の歡まじき背一の離別は何か自分とをいかに引、
つ小下行く如く私の胸は震ふる。南北を九時十分蘇
州へと旅の一步を踏み出す。沿線の両側には黄ばいた麥の刈り、
初夏六月の下陽は照り降りける。川入の、一そむ農夫の長々と
目を映る。十時四十分蘇州着。八東旅館に泊る。景徳路の
願事館を訪ね、先輩市川代へ會見、月代の在蘇活躍の足跡
を知る。

六月一日 晴 蘇州

は乃西車は揺ら小ふり蘇州名勝を巡る。虎邱山の青山、西
園の美く、弘像、寒山寺の鐘、寂しき中、首の揺れる。

南朝を滅する蘇州の景現を見る

六月三日 晴 南京

予前 南京へと蘇州を發す。鎮江より。今日この陸田は水田と
なり。又山丘の長見し。始り 列車も正調を運つて走る。午後四時
南京着。一路城内に向ひ 太平路の南洋旅館の宿泊。龍井の熱い
茶をすう。あけり 腹小の足を伸ばす。時、午後六時。

六月四日 晴 南京

当南京は戦前 千万の人口を擁し 首都であつた。此の事あり
その中 千万は 蘇 千万余は漢口 方は香港、一時進出。此の街と此
方も現はは復興ものなり。七十八万は突破して居るであらうと
外道の南京の鬼味を体験、特に此人の道心は驚く程目につく
午後四時、予中山陵、明孝陵を経て先鋒門、玄武湖、到る。

六月五日 晴 南京

軍報第部一を訪門。午飯の後、孤田代の好意により、自記半の
て川代と戦跡を巡る。先づ南京城巨嶺の瑞清を周いふ中華門
に到る。敵軍方の当將の猛射は今に之数。彈痕を城壁に破し訪小
る省を以て皇軍^{辛苦}の當將を想起せしり、うゑゝ感激多量の決
地に入小い。更、城の西南高地兩砲台に至り、城壁を見下り
南京攻撃の戦局を聴く。午後六時紫瓦に來船。一夜を長
江の上で明し明日は愈調音地漢口へ向ふ。

六月六日 晴 昭工

リ 七日 晴 昭工

晝頃寧慶に着く。此処は江より見ると白壁の美しく、所か
に強いて見ると相子荒廢して居ると云ふ。逃難民の帰つて來る平野地

知つて出さうといふ。否一時は帰つたが市況が薄く石の卸告状と
 分りあつた。支那軍の空襲を避ひながら四散しつゝ云ふ風聞もある。
 近江舞子の塔が柏室の画の如くくつきりとその古風な等々を居る。

六月八日 晴 堀上

九日 晴 漢口

愈々漢口の漢口が目に取つて出す

テキサスの火油会社の張子の

貯蔵多クは兵馬の糧食の中、何か宿営のふいけ社を手にて

居る。四将上陸。先づ三井洋行を訪問。先づ吉田代り

取り計ひで川口三階の一室を宿舎として借り置く。

漢口は炎暑、電柱の柱が焼けて死なうと云はれて居る地が

来り始めて其の猛暑に驚く。夜は三将と重慶煤炭の

方面を漢口工室を盛人の通する。

六月十日 晴 漢口

午前、挨拶方々又調査に廻し種々便宜と得んが爲り
領事館を訪内す。先輩、泉水代と面談。岳陽往つて
泊して海軍々將務所——藤原中佐殿の紹介を受く。
領事館を辞——直方、藤原代を訪内。多大なる便宜
を戴きナトリ弁の靴を便乗の乗と出す。午後より早速
調査に取りかかる。吉田代より水野代へ紹介を受く。代は
岡谷漆店より派遣社員として三井及岡谷両店の漆買付
けをさして居る方である。中肯敏の程依頼——馬場先生より
商売夢中の漆屋中へいりて吉田予備資料と基礎として調査
を始む。

六月十一日 晴 漢口

午前、日租界の巡視を。工場の南北の両端、如き修繕
の情勢あり。復興工作未だ居るに――非人は以て將
て移転。日界を中へて戦前の^{頃の}市況の中心街將
て移り、邦人の発展は、いふまでもある。現在邦人取
て千人より一日千人の増加を
見ると。午後水田洋行と市内。水野代の中務室
にて調査のいる。戦前の^{頃の}市況と破壊の思ひ――調査
あらす。

六月二十二日 晴 漢口

漢口大陸新報社の紹介で漢口特別市政府市長張代史財政
部長康代石路。飛ぶ小の時間と多く喋らるゝ能ふ。調
査には何等の資料も得ず。午後大陸新報と市内資料

よぶむるも無し。此より一將在侯口調査を切り切り 明日は
湖南省漆の概況を知らんか 岳陽の何ふべく旅をなす
取りいゝる。

六月十二日 晴 船上

八時云航 岳陽へと向ふ。長江の濁流と云那特有の景
相ふる風景は河底まで往つても盡さぬ 而して天下の大河も
此りから距離を測す 毎に目に見えて河底は狭くある。

維長其他幹部の接接の後 岳陽の中佐殿より
岳陽作戦の付く若干の話を承り 種々の中意より一河
底船一つ 海軍の兵士との起居に入る。始めて遭遇する此の味
道は又てい物珍らしく感ず。

六月十三日 晴 後雨

二時工院 夏路と雨の中を紹介、高澤邦彦とこのう
才線、近き分、行交ふ兵隊の素気は何か殺気匂つ匂着
を感ず。おー着る、所は淋病と流し落る。本隊の留
居、副官金本中尉教を訪ね、刀代の柳亭意、川殿、精
臨の一帯を借り、滞在申柳尾介、ある事と云ふ。時、午後六時

六月十四日 曇後雨

八時平金本中尉の柳案内、堺区を見学し了特務班
を訪川す。去陽、三、班長風儀より柳高見を聴く。何しろ又つと
七千の増民が糊口をのりする、ユート、彼等は内心不安の中、
生活し、被爆と混乱は物質の欠廻り、知ではふく、
停頓状態である。宣撫班長の案内で新式小學校を参観。

四五十名の生徒が日本の唱歌を盲目歌ふ。先生は兵隊名、
五郎八二名である